【報告】

慢性看護学実習における遠隔実習プログラムの構築と実践

河野 貴大[1)]　大山 末美[1)]　兼子 夏奈子[1)]　長山 有香理[1)]　本田 彰子[1)]

1）聖隷クリストファー大学看護学部

Development and Implementation of Remote Training Programs in Chronic Care Nursing Practicum

Takahiro Kono[1)]　Suemi Oyama[1)]　Kanako Kaneko[1)]　Yukari Nagayama[1)]　Akiko Honda[1)]

1）School of Nursing, Seirei Christopher University

≪抄録≫

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大により、多くの看護系大学において、臨地実習の中止または変更を余儀なくされ、本学でも実習施設の方針により 5、6 月の臨地実習は中止となった。そこで、慢性看護学領域では、臨地実習に代わる学修方法として、学修の質を担保しつつ感染を拡大させないためにオンラインによる遠隔実習プログラムを構築した。オンデマンド視聴覚教材や e-learning システムを活用し、臨地実習と同様の学修ができるように計画し、実践した。学生の到達度や満足感として、臨地実習と比較し大きな変化はみられなかった一方で、臨床現場における緊張感や感情面での情緒的な学びを得られにくいという課題が挙げられた。今後、Society 5.0 に向け ICT（Information and Communication Technology）教育の推進が求められておりオンラインを活用した教育は非常に重要となることが予測される。遠隔実習がより効果的な学修につながるように今後も検討を重ねていきたい。

≪キーワード≫

慢性看護学、遠隔実習、看護基礎教育

Ⅰ．はじめに

看護基礎教育における臨地実習は、知識・技術を看護実践の場面で適用し、看護の理論と実践を結びつけて理解する能力を養う場として非常に重要である。しかし、今年は新型コロナウイルス感染症（以下，COVID-19）の感染拡大により、多くの看護系大学において、臨地実習の中止または変更を余儀なくされている。日本看護系大学協議会によると、9 月以降の実習科目について、大学全体のうち 83.4％が実習日数や時間の変更を予定していることが報告されている（日本看護系大学協議会，2020）。

このような状況を受け、厚生労働省は、学校養成所等の運営に係る取扱いとして、実習施設の確保が困難である場合には、年度をまたいだ実習や、臨地実習に代わる演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を修得することとして差し支えない旨の通達がなされた（厚生労働省，2020）。本学においても、臨地実習の可否は実習施設の方針に従う形となり、2020 年 5、6 月の実習は病院から受け入れ中止が要請された。

そこで、慢性看護学領域では、臨地実習に代わる学修方法について、学修の質を担保しつつ感染を拡大させないためにオンラインによる遠隔実習プログラムを構築した。

現在、医療の高度化やオンライン診療等の情報通信技術（Information and Communication Technology；以下，ICT）が普及・発展しているなかで、看護基礎教育においても、新しい教育の方法を検討していくことは非常に重要である。そこで、2020 年 5、6 月に実施した慢性看護学実習における遠隔実習プログラムの構築と実践について報告するとともに、新しいプログラムで学修を行った学生の意見や臨地実習との比較から今後の課題について考察する。

Ⅱ．授業戦略

1．科目の位置づけ

本科目は、3 年次秋セメスターから 4 年次春セメスターの 3 単位 135 時間で構成されている。科目の位置づけは、「獲得した専門分野の知識・理論や技能等を総合的に活用し、それぞれの人にあわせて課題を解決する実践力につなげることができる」であり、科目目標は表 1 に示す。

遠隔実習プログラムの構築にあたり、科目目標のうち、「③病をもって生活する患者と家族の療養上の問題を抽出し、看護過程を展開できる」という目標は「③病をもって生活する患者と家族の療養上の問題を抽出し、自立した生活のための具体的支援を考えること

表 1．慢性看護学実習における科目目標

科目目標
① 慢性疾患が患者と家族の生活に与える影響を、身体的、心理的、及び社会的側面から総合的に捉えることができる。
② 慢性疾患の特徴を理解し、長期的視点で必要な看護を理解できる。
③ 病をもって生活する患者と家族の療養上の問題を抽出し、看護過程を展開できる。
④ 病をもって生活する患者と家族が、自立した生活を送るための支援を理解し、看護を実践できる。
⑤ 慢性疾患看護の看護実践を通して、病をもって生活することに対する看護者としての考えを深める。

ができる」とし、「④病をもって生活する患者と家族が、自立した生活を送るための支援を理解し、看護を実践できる」という目標は「④看護職としての倫理、患者の安全安楽を守る看護を考えることができる」に変更した。

2．教授方略

慢性看護学実習の教授方略として、これまでの臨地実習から継続した取り組みおよび遠隔実習プログラムにおける新しい取り組みについて示す。

1）臨地実習から継続した取り組み

科目目標を達成するために、慢性看護学実習では認知的方略として学生の学修への行動が変わることを目指している。実習初日のオリエンテーション時から、「学修姿勢を切り替えること」を繰り返し伝え、自発的な学修を促している。また、1週目および2週目の最終日には学生が自分の学修方法および成果を振り返り、何が効果的で何が良くなかったか言語化させる時間を設けることで、自ら気付き、学び方を工夫する態度を育むことができるように設計している。さらに、教員が学修者をアセスメントしたうえで、承認欲求を満たすような承認をすることで学修行動の強化を図っている。

2）遠隔実習プログラムにおける新しい取り組み

これまでの慢性看護学実習では、学生は3週間を通して内科系の病棟に入院している1～2名の患者を継続して受け持ち、必要な看護を提供しながら実習目標の達成を目指していた。しかし、受け持ち患者の多くは高齢で複数の基礎疾患を抱えていることが多く、在院日数が短縮しているなかで、学生がゆっくり時間をかけて患者の全体像を把握し、看護実践を行うことは難しくなっていた。そのため遠隔実習プログラムでは、推論に基づいて情報を整理・収集し、短期間で必要な看護実践を行うことができるように「臨床推論」の考え方を学生が習得できるように計画した。多くの情報をもとに分析をするのではなく、患者に関する少ない情報のなかで不足している情報を導き出し、優先順位を考えて情報を収集することができることを目指している。学生同士のディスカッションや教員の発問により学生自身の気付きを促すとともに、「生命の危機に関する情報」→「苦痛に関する情報」→「安全・安楽に関する情報」という患者観察の順序性のルールを伝え、そのルールをもとに未知の事例に適用する過程において知的技能の習得を図っている。

また、COVID-19の世界的パンデミックのなか、翌年から医療の最前線で働く看護学生が、医療の現状と課題を考えることは、非常に意義があると考え、遠隔実習プログラムでは、COVID-19に関するカンファレンスを計画した。カンファレンスのテーマも学生が自ら考え、様々な手段で情報を収集し自由にディスカッションを行うことで、4年生のもつ発想力やこれまでに学修してきた経験を生かすことに加え、臨地実習ができない不安や焦りといった感情表出を促すことを狙いとした。

Ⅲ．倫理的配慮

対象となる学生に、慢性看護学実習での学びや感想等を報告に用いること、報告の際の写真の掲載、個人が特定されるような記述はしないことを説明し、同意を得た。

Ⅳ．遠隔実習プログラムの実践と学生の反応

1．対象

2020年5、6月の実習では、3年次秋セメスターにて領域別実習を経験している4年生が対象となる。同じ成人看護学領域である急性期看護学実習は履修済みであり、臨地にお

表２．2020年度慢性看護学実習における遠隔実習プログラムの学修スケジュール

週目標	学修方法
１週目 科目目標 ①～④	１日目：Zoom（全体） 【オリエンテーション】 【演習】：事前課題の確認、疾患・症状の機序に関するディスカッション 認定NPO法人 健康と病いの語りディペックス・ジャパン（DIPEx-Japan）慢性疾患である関節リウマチを抱えた患者の語りを視聴 【課題】：症状や疾患を抱える成人期にある人への看護に関する学びや気付きを整理し、レポートにまとめる
	２日目：Zoom（実習グループごと） 【演習】１日目の演習、課題レポートに関するディスカッション
	３日目：Zoom（実習グループごと） 各自、WebClass事例を読み患者像をつくる Zoomを用いて、患者像、観察項目などをディスカッションする Zoomを用いて、「最初の患者さんの訪問」を想定しディスカッション ＊アセスメントする中で、不足の情報は何か、自分が予測したものを決定づけるためにどのような情報が必要かを各カテゴリーで抽出する
	４、５日目：上記課題を自宅学修
２週目 科目目標 ①～④	１日目：Zoom（実習グループごと） ＊課題を各自のZoomカメラの前に提示 ３、４つのカテゴリーの不足の情報を確認、根拠についてディスカッション
	２日目：自宅学修 各カテゴリーで不足な部分を追加・修正、関連図作成、重点アセスメント作成、看護計画作成
	３日目：Zoom（実習グループごと） ＊課題を各自のZoomカメラの前に提示 看護計画の優先順位確認（上位３つ程度）についてディスカッション
	４日目：自宅学習 看護計画の優先順位で看護計画の根拠、期待される結果、具体策を作成。
	５日目：学内演習（中間面談） 期待される結果と具体策のマッチングを確認 看護計画に基づき、テーマ（セルフマネジメントや退院支援）に関するカンファレンスやロールプレイの実施 【課題】：Zoomでの指導やカンファレンス内容を活かして系統別アセスメント、関連図、重点アセスメント、看護計画を提出
３週目 目標：臨地で経験する基本的な技術を習得する	１日目：ナーシングスキルの自己学修 ＜共通項目＞すべて手技の復習とテストまで行う ・スタンダードプリコーション ・医療廃棄物の取り扱い ・酸素吸入法高流量システム ・輸液管理 その他、各実習病棟で必要なフィジカルアセスメント項目、看護技術について提示
	２日目：Zoom（実習グループごと） 学生によるナーシングスキルの問題に関する解説・プレゼンテーション
	３日目：自宅学修 看護師国家試験問題：WebClassのテストを受ける 間違った問題を教科書で調べ整理する
	４日目：Zoom（選択テーマごと） 「COVID-19と医療」に関するカンファレンス
	５日目：Zoom使用（最終面談）

いて一通りの看護過程の展開は実践している。

２．実習方法

COVID-19 の感染拡大を受け、3 週間のオンラインによる遠隔実習を計画した（表 2）。

１）オンデマンド視聴覚教材の活用

慢性看護学実習 1 週目の 1、2 日目は、認定 NPO 法人 健康と病いの語りディペックス・ジャパン（DIPEx-Japan）データベースから、慢性疾患である関節リウマチを抱えた患者の語りに関する動画を視聴し、病態・治療に関する知識の確認と、症状が患者の生活にどのような影響を及ぼしていたか、また、患者がどのように対処していたか等について、Zoom（Zoom Video Communications，Inc.）（以下，Zoom）を活用したディスカッションを行った（図 1）。

オンデマンドの動画を活用することで、繰り返し視聴することができ、慢性疾患を抱えた患者とどのように関われば良いかを考えるきっかけとした。演習後には、患者の語りやディスカッションを通して、症状や疾患を抱える成人期にある人への看護に関する学びや気付きを整理し、レポートとして提出させた。学生は、「看護するうえで症状のメカニズムを理解することが重要だとわかった」、「成人期に病気を抱えることで様々な困難や生活への影響があることを理解できた」、「患者自身が行っている対処に目を向けるようになった」といった反応がみられた。

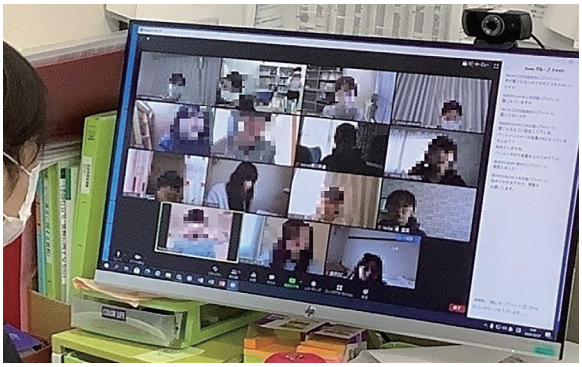

図１．Zoomを活用したディスカッションの様子

２）臨地実習で受け持つ患者を想定した看護過程の展開

3 日目からは、4 ～ 5 人の実習グループ毎に Zoom のミーティングルームを作成し、教員の準備した事例を用いて臨地実習で受け持つ患者を想定した看護過程の展開を行った。対象となる学生は、これまでの領域別実習における経験から患者の思いに寄り添うことの大切さは理解できている傾向にある。そのため、学生の気づきへのきっかけとして慢性疾患の症状により生活に支障をきたしている患者に関する情報があれば、学生自身で看護過程を展開することができると考え事例を作成した。

事例に関する数行の情報から、ベッドサイドに行く前に患者像をイメージし、必要な情報を整理・情報収集の優先順位を決めることや、患者が自立した生活を送るために必要な支援についての看護計画など、個人学修とグループ・ディスカッションを繰り返しながら多角的な視点で看護を考えることができるように計画した。また、従来 3 週間かけて展開してきた看護過程をより臨床に近いスピードで展開することができるように学修進度を設定した。日々の課題については、各自の Zoom カメラの前に提示したり、課題を記載したファイルを画面で共有したりすることで、進捗状況や不明な点を確認し、学生同士で話し合う時間を設けながら適宜教員が指導した。学生は、自分の考えを他者に伝えるという経験を通して、他者に理解してもらうために自身の思考を整理したり、発表方法を工夫したりしていた。また、臨地実習では学生が別々の患者を受け持ち、それぞれの看護過程を展開していたが、同じ事例について考えることで「他の学生の考え方や価値観について知ることができ、自身の看護を見なおすことができた」と話す学生もいた。

2 週目の最終日には、学内において十分な距離を確保できる部屋を使用し、感染対策を

行いながら、それぞれが立案した看護計画を学生が患者役になって模擬実践し、良かった点や課題を発表し合う演習を実施した。患者役の学生からは、「説明に医療専門用語が多く入ってしまっていることに気が付いた」、「こちらの表情を見て理解度を確認しながら説明をしてくれており理解できた」などの意見が聞かれた。

３）e-learning システムの活用

3 週目の目標は、「臨地で経験する基本的な技術を習得する」とし、オンライン学修ツールであるナーシングスキル日本語版（Elsevier）（以下，ナーシングスキル）を活用しながら、フィジカルアセスメントやスタンダードプリコーション、酸素吸入や輸液管理等の看護技術について基本的な手順や留意点を学修するように提示した。翌日、Zoom で看護技術に関するプレゼンテーションを学生に行ってもらい、知識をアウトプットすることで自身の理解を定着させるとともに、教員が発問することで原理・原則に基づいた実践的な方法への理解を促した。また、学習管理システムである WebClass（日本データパシフィック株式会社）（以下，WebClass）上に過去の看護師国家試験問題をいくつか抽出し、学生が間違えた問題を復習することで知識の定着を図りつつ、現在学修していることが国家試験にも出題されていることを意識させた。

４）COVID-19 に関するカンファレンス

現在、COVID-19 によって多くの人々がこれまでの生活スタイルの変更を余儀なくされており、制限の中でどのように工夫し生活を再構築していくかということは、慢性疾患を抱える患者の看護に共通することである。また、翌年から医療の最前線で働く看護学生が、医療の現状と課題を考えることは、非常に意義があると考え、3 週目には「COVID-19 と医療」について、学生同士でカンファレンスを行う時間を設定した。カンファレンスのテーマは学生から募集し、どのテーマに参加するかも学生に選択させた。選択したテーマについて、これまでに学修してきたことやメディア等の情報から考えたことを発表し合い共有した。

学生から挙げられたテーマは、「病院の感染防止対策物資が不足している場合にどのような方法で感染防止をするか」、「COVID-19 に伴う患者・家族の不安への対応について」、「一般病棟における感染症患者のゾーニングについて」など、4 年生がこれまでの領域実習の経験から考えたテーマや翌年から看護師として働くうえで気になることに関するテーマが数多くみられた。また、「コロナ禍における病院と看護学実習生」、「自粛できない人と医療者」というテーマもあり、それぞれの立場での討議も行った。学生は、調べてきたことを発表するなかで、COVID-19 について理解はしているが行動に移せない人々の気持ちや看護学生として実習に行けなかったことへの不安、患者を守るうえで実習生を受け入れられない病院側の考えなどについても話し合われていた。

Ⅴ．考察

今回、慢性看護学領域では臨地実習に代わる学修方法として、初めて遠隔実習プログラムを構築・実践した。学生の意見からは「看護するうえで症状のメカニズムを理解することが重要だとわかった」といった学修の必要性に対する気付きや「グループで話し合う時間が多く、紙上での事例展開でも深く考えることができた」など、他者の意見で自分の考えが深まる体験について語られ、遠隔実習であっても自己の学修をさらに深化させていた。また、それぞれが立案した看護計画を学生が患者役になって模擬実践する体験を通して、セルフマネジメント支援において非常に重要となるアンドラゴジーやコンコーダンス

の考え方の理解につながっていた。これらの結果から、本プログラムで学修を行った学生の学びは多く、かつ科目目標を十分に達成できたと考える。遠隔授業についての報告では、従来の対面式の授業と比較して、新しい学びや発見があり、受講者がやりがいや満足感を得られやすいという報告がある（文部科学省，2018）。今回の遠隔実習においても、学生は新しい学びや発見についての感想が多く、満足感も高かったのではないかと推察される。また、「学習する時間があったため疾患や治療について理解が深まった」、「時間が沢山あったため深い部分まで調べることができた」という意見もあり、本学では臨地への通学に要する時間を学修等に活用できたことも遠隔による利点であったと考えられる。

より良い医療・看護サービスを提供していくためには、看護師等の医療関係職種が相互の信頼関係の下に密接に連携することが重要であると言われている（厚生労働省，2003）。また、多職種の連携を行ううえで、自己の意見を他者に伝わるように述べることや他者の考えを積極的に聴くというコミュニケーション技術は非常に重要であり、そのような技術の習得にはグループ・ディスカッションやグループ・ワーク等のアクティブラーニングが有効である（川野，2016）。今回の Zoom を活用した遠隔実習において、学生は、「ディスカッションを通して積極的に意見交換ができた」、「他者の意見から、考え方の違いや自分に足りない視点を理解できた」と述べており、遠隔実習であっても、将来看護職として働くうえで必要不可欠となるコミュニケーション技術について意識する機会になったと考えられる。

その一方で、遠隔実習では直接患者や看護師と関わることがないため、臨床現場における緊張感や感情面での情緒的な学びは得られにくいことが推察される。今後、より緊張感をもちながら、患者から情報を引き出すコミュニケーション技術の習得や看護師への適切な報告・連絡・相談ができるようにするため、慢性看護学領域以外の教員に協力してもらうことや、遠隔での模擬患者（Simulated Patients）の参加等についても検討していきたいと考えている。

Ⅵ. おわりに

COVID-19 の感染拡大を受け、急遽導入された遠隔実習であったが、Zoom やオンデマンド視聴覚教材の活用、e-learning システムの活用によってこれまでの臨地実習と比較しても十分な学修成果が得られていると考える。今後、Society 5.0 に向け ICT 教育の推進が求められており（滝沢・重光，2020）、オンラインを活用した教育は非常に重要となることが予測される。また、2021 年 1 月現在においても COVID-19 は収束の兆しが見えないことから、次年度以降の臨地実習においても中止や延期となる可能性が考えられる。オンラインや ICT を活用した教育がより効果的な学修につながるように、今後も検討を重ねていきたい。

謝辞

本年度、急な実習プログラムの変更にも関わらず、しっかりと対応し学修を行うことができていた学生の皆様に深く敬意を表します。

また、遠隔実習プログラムの構築・実践に際し、クラウド教材導入へのご尽力いただきました領域の先生方、新たな機器および教育資源を整えていただきました教務事務センター、ICT センターの職員の皆様に感謝申し上げます。

文献

一般社団法人日本看護系大学協議会 看護

学教育質向上委員会（2020）: 2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査結 果，https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyAreport.pdf（2020.12.10）.

川野司（2016）: アクティブラーニングとして討論を取り入れた授業の有効性，九州看護福祉大学紀要，17（1），47-59.

厚生労働省（2003）: 新たな看護のあり方に関する検討会報告書，https://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0324-16.html（2020.12.20）.

厚生労働省（2020）: 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関連職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について，https://www.mhlw.go.jp/content/000636144.pdf（2020.12.11）.

文部科学省（2018）: 遠隔教育システム導入実証研究事業　遠隔教育システム活用ガイドブック　第 1 版，35-37，https://www.mext.go.jp/content/1404424_1_1.pdf（2020.12.28）.

滝沢利直，重光由加（2020）:「Society 5.0」における教育とは（4）これからの社会における教育のあり方を考える，東京工芸大学工学部紀要，43（2），1-7.